

第4学年「社会」学習指導案

授業者 佐藤 孔美

2月16日(木) 1階多目的室 9:00~9:40

- 1 題材名 公立図書館はどうあるべきか～本来の「公共」の役割・あるべき姿とは～
- 2 題材について

(1)【場面設定】：「時事的な社会事象について、他者との差異や葛藤を生じる問題」を扱う内容

「今、話題となっている図書館の変容は、これからの公立図書館のあり方としてよいのだろうか。」

(2) 本題材と子どもたちとの関わり

子どもたちに紹介する事例は、2013年に開館した、図書・書店・カフェが一体的に融合した斬新な他県のT図書館である。管理を民間に委託（指定管理者制度）し、閉館時間は延長され、休館日はなくした。市民には、サービスが向上しとても利用しやすい図書館に生まれ変わった。しかし、このT図書館と同様の運営方法で図書館を建設しようと考えたK市では、図書館建設計画の見直しが市民運動によって提起され、住民投票で見直し票が多数を占めた。O市では一旦は管理を民間に委託したが、公立図書館の運営は民間にはそぐわないとし、再び市の直営に戻したのである。このように「新しい公共」と騒がれもてはやされたT図書館の運営方法は、私たちに見えない問題点が多く存在している。T図書館のあり方は、賛否両論分かれる事例であり、賛否を話し合う中で、何が最も根源的な価値観の対立なのかを考え、本問題の、「争点」を見出していきたい。そして「争点を知る」過程の中で、様々な「判断の基準」について考えさせたい。

(3) 本題材において育てたい「政治的リテラシー」

○社会的な事象や時事問題の対立点、論点や、それらの背景となる基本的事実を理解する。	新しいT図書館についての基本的事実を理解し、「T図書館は、今後も増えていく方が地域の人たちにとってよいのか」という「仮の争点」から、この問題の「真の争点」、すなわち「公立図書館はどうあるべきか（公共の役割・姿とは何か）」について話し合いを通して考えることができる。
○社会的な事象や時事問題の対立点や論点について多面的（他者への視点）な見方で考える	「T図書館は、今後も増えていく方が地域の人たちにとってよいのか」という問題の「争点」を形成する過程の中で、地域の人々の声・新聞記事などによる資料やインタビューや対話的学びを通して、様々な立場による様々な「判断の基準」をもつことができる。
○読みとった情報・知識を、自分の主張の根拠にする。	本問題に対する、地元の人々の声・全国的な声・身近な人へのインタビューなどから、それらを自分の考えの根拠として活用する。
○様々な立場の人々が幸せになれる条件を考えて決定する。	「公立図書館はどうあるべきか」を通して、様々な「判断の基準」の中から、「争点」を見出し、「本来の公共の役割・姿とは何か」について考える。

3 学習指導計画（3時間目／全8時間）

0時：「ブック・ウーマン」という本の読み聞かせを行い、「少年はなぜ変わったのか」について考えさせる。

1～2時：T図書館について紹介し、T図書館が文京区の図書館と違うところや、その良さを見つける。

3時：「T図書館は、今後も増えていく方が地域の人たちにとってよいのか」について話し合いをする。

特別時程（「てつがく」を含む）：「図書館は、わたしたちにとって必要なのだろうか」↳本時3/8時間

4～6時：本問題に対する様々な声を集め、話し合いを通して、自分の考えを構築していく。

7時：論点を絞り根拠を基に本問題に対する話し合いを通して、本問題の「争点」について考える。

8時：「公立図書館とはどうあるべきか」、自分の考えや反論を想定して書くことができる。

4 本時について

(1) 本時のねらい

T図書館に対する反対の声を考え、本問題に対する自分の「判断の基準」を新たにもつことができる。

(2) 予想される本時の展開

主な学習活動と子どもの姿	留意点
<p>○本時の課題を確かめる。</p> <p>T図書館は、今後も増えていく方が地域の人たちにとってよいのか</p> <p>★増やしていくべきである</p> <ul style="list-style-type: none"> ・開館時間の延長や年中無休という点で、サービスがさらに向上している。 ・利用者数の20倍増は、最も斬新な運営方法の顕著な例である。 <p>★増やさない</p> <ul style="list-style-type: none"> ・図書館には専門的な知識をもっている司書の職員にいてほしい。 ・図書館は本来歴史的・文化的に価値のある公文書の収集・保存に努める場 	<ul style="list-style-type: none"> ・全員が増やしていくべきであるという意見の場合は、早めに反対の立場をとったK市の市民運動を紹介し、K市が反対した理由から、新たな「判断の基準」を見出すように促す。